

第四回新鋭評論賞 正賞

「合掌部落」の時間・「吹田操車場」の時間

―登四郎と六林男の交叉点―

鈴木 光影

「合掌部落」の時間・「吹田操車場」の時間
—— 登四郎と六林男の交叉点

鈴木光影

1 はじめに

成果はともかくとして敢闘した二年半である。もっともそれだけに粗い作品もあり、独りよがりのものであると思うが、僕の作家成長の上にこうしたファイトに充ちた時期があったことは、何かの意義のあることと思う。

成果はともかくとしてファイトに充ちた時間を持ち得たことは僕の歴史の中で意義があると思う。

冒頭から二つの酷似した文章を引用したが、それぞれ別の作者の句集の後記である。前者は能村登四郎の第二句集『合掌部落』（昭和三十三年刊）、後者は鈴木六林男の第三句集

『第三突堤』（昭和三十二年刊）である。一方の能村登四郎（以下登四郎と記す）は伝統派の流れを汲む（一貫したものがあるとすれば、有季定型の中で叙情性を追求していく事だけである^①）。もう一方の鈴木六林男（以下六林男と記す）は新興俳句の流れを汲む（俳句における僕の祖国は、季のない俳句の世界である^②）。依って立つ俳句の土壌を異にする同時代の俳人が、ここまで似通った後記を残していることに意外性を覚える。生前の二人に交流はあった。登四郎は、六林男の第七句集『後座』の解説の筆を執り、
 「吹田操車場」と私の「合掌部落」とがその発想においてかなり似ている^③と記した。また他の場面では六林男のその「誠実」な「人柄」に対して「私にとって鈴木六林男はもつとも好意を惜しまない俳人^④」とまで言

① 能村登四郎「伝統の流れの端に立って」
 ② 鈴木六林男「短い歴史」
 ③ 鈴木六林男『後座』解説「不撓の旗手」
 ④ 俳句研究⁴³・9月号「鈴木六林男・人と作品」

っている。

一方の六林男は、句集『合掌部落』への感想を「能村登四郎覚書^⑤」の一度では論じられず「補記・能村登四郎覚書」を書き足すほどの熱い視線を送った。『合掌部落』にかかわって、ずいぶん気ままに書きつらねてきたが、僕にも能村の「合掌部落」と同時代に「吹田操車場」や「大王岬」を書いているので、天に唾する思いである^⑥。と、自らの群作と並列させ、自論にて展開した「合掌部落」への批判は自らの句も逃れ得ていないことを記している。

俳句の立場を異にした二人の俳人は、互いに作家としての好意や敬意を抱いていたようだ。さらにそれが、当時「社会性俳句」と呼ばれた一時期の群作で重なっているという点に私は注目する。

登四郎は、「俳句と言うもののジャンルの

^⑤ 「俳句研究」⁴²・10月号に掲載
^⑥ 鈴木六林男「補記・能村登四郎覚書」

もつ器の小ささが、社会というスケールの大ききく、且つ思想性のあるものを盛りかねてい
る^⑥。」と評論「俳句の非社会性」で記した。
同時に、「非社会的な俳句を一層非社会的な
袋小路に追い込んで了っている」と俳壇の現
状への危機感を表している。これが書かれた
のが昭和二十八年「合掌部落」を發表したの
は昭和三十年^⑦なので、「俳句の非社会性」
を自覚するが故に、あえてそこに挑んでいっ
た、それが登四郎の「ファイト」であつただ
ろう。

一方の六林男は、へあれ（筆者注「吹田操
車場」と「大王岬」で僕のやろうとしたこと
は「季語」を徹底的に追及し、^{いたぶ}甚振ること
あつた。（略）最初から社会性を全く度外視
した訳ではないが、それは作品の中から要素
として後から出てきたものであつた^⑧。」とい

⑦ 編集 能村登四郎「俳句の非社会性」。大野林火
の特集「俳句と社会性」の月号（昭和二十八年刊）
⑧ 前集「俳句と社会性」の月号（昭和二十八年刊）
⑨ 前集「俳句と社会性」の月号（昭和二十八年刊）

う。「季のない俳句の世界」を「祖国」とする六林男の「フアイト」が相對しているのは「季語」である。

ダム建設の為に湖の底に沈む運命にある一村「合掌部落」と、厳しい自然環境の中間人と機械が昼夜休みなく働く広大な労働現場「吹田操車場」。どちらも日本戦後の経済発展の奔流から零れ落ちた犠牲者たちとその空間を主題としている。その問題意識において、二作品は確かに共通している。しかし前述したように両者は、題材だけではない「俳句性」(一方は俳句の非社会性、もう一方は季語)への「フアイト」という点で共通している。

両者を比較し、その類似点、相違点を検証し、現在や未来に向けた俳句における「社会性」と「俳句性」の一考察としたい。伝統と革新が交叉する所から、新しい伝統は生まれる。

本論における交叉点は能村登四郎と鈴木六林男である。

2 「社会性俳句」の時代

前段として、「社会性俳句」の代表作と言われるこの二作品が生まれた当時の俳壇の状況と時代背景を簡単に整理しておく。

昭和六十年の『俳句』誌上の対談で岸田稚魚は、「社会性俳句は第二芸術論へのひとつの回答になっている^⑨」と述べている。桑原武夫が「第二芸術」を『世界』に発表したのは戦後間もない昭和二十一年十一月である。桑原の批判に対抗する実作として「社会性俳句」はある意味でブームと化した。また、当時の社会状況もそのブームに油を注いだ。同対談で沢木欣一は、「社会性俳句と言われるようなものが強く出てきたのは内灘闘争以後だろうとぼくは思っています。だから二十八、二十九、三十、三十一年ぐらい」。沢木主宰の俳誌「風」のアンケート「俳句と社会性」も、

^⑨（対談者 俳句と時代 沢木欣一 / 社会性俳句をめぐって 岸田稚魚 / 川崎展宏）

作品「塩田」の発表も昭和三十年である。さらに沢木は当時を振り返り、「人間の在り方というものが単なる個人じゃないんで、群を背負った個人だというような意識」があったと言う。沢木が語るこの個人の社会意識の變化は、同時代の登四郎・六林男も当然感じとっていただろう。

また、戦後の高度経済成長が始まるのは昭和三十年ごろである。「第二芸術」論への反発、政治社会運動の意識の芽生え、高度経済成長の入り口。「合掌部落」と「吹田操車場」は、このような時代に生まれた。二作品は俳壇や時代のブームに乗ったとも言える一方、アクチュアルな時代の空気に俳句をもって対峙した、と言うこともできるだろう。

3 登四郎・六林男の互いの評価

前述した通り、六林男は「合掌部落」に対して、登四郎は「吹田操車場」に対してそれ

ぞれ評論を残している。この章では、それらを取り上げ、両者の「社会性」へのアプローチのの違いを見ていきたい。

まず「合掌部落」を評して六林男は、次のような批判的な意見を述べている。「能村が「旅」に出るについて心にいだいたのは、こゝとであつたはずであるのに、俳句に書き終わつたとき、ものにつきすぎた^⑩」、「造成されるダムの背後に盤踞している熱エネルギー政策を見透す視座の設定を欠いたから白川村の合掌造りや飛驒の蝶を書いて戻つたことになつた^⑪」。「合掌部落」より、六林男の批判に沿うと思われる例句を私が挙げてみる。

葛の蔓とあそびてさびし馬の鼻

霧を来て葉脈あらし飛驒の蝶

葛揺れて合掌部落が落す水

⑩ 「能村登四郎覚書」(俳句研究42) 1

⑪ 〇〇

⑫ 前述「補記・能村登四郎覚書」

どの句からも、叙情性によって捉えられた村の景から、近い将来消えてゆく存在のへさびしゝさが伝わってくる。合掌部落を旅行した吟行句としては申し分なく見事である。が、これらの風物を消滅させるに至る「背後」への批評性はここには薄い。六林男は、登四郎が後書で書いた「社会の圧力の下に苦しみ、且つ戦い生きる人間の描出に重点を置いた」にしては「背後にある真実に配慮をおこたった」と指摘する。六林男はきつと、登四郎には眼前にあるものの「背後」を書くことを期待していたのだ。そしてそのためには「もの」的情绪を脱して、「事」を描くべきだったと主張した。

一方の登四郎は「吹田操車場」に対して、「いま冷静に鑑賞してみても果たして当時の感動がそっくり伝わってくるかと言うと、残念ながら色褪せたフィルムのように妙に白々しいものだけが残る。(略)一句一句の緊密の乏しさやコトを伝達することに懸命になって、

俳句に含有すべき詩性^{ポエジー}を忘れてしまった^⑩。という評価をしている。前掲に合わせ、三句挙げよう。

連結手大寒の地にすぐ戻る

北風の貨車眼で追い迎え立ちつづけ

地下足袋凍る徹夜の君ら会えば笑む

操車場の厳しい労働環境、その中で生きる労働者たちの働きぶり、彼らの確固たる人間性が活写されている。しかし登四郎が指摘する通り、詩の言葉としての研磨に乏しく一句として独立性についても薄いように感じる。

対照的なのは、六林男は登四郎に「事」を書けと言い、登四郎は六林男に「コト」から離れると言う。

現在でも、一般的に俳句は——特に伝統俳句的立場からは——「事」ではなく「もの」

⑩ 前出「鈴木六林男・人と作品」

を描いた方が成功すると言われている。伝統派の登四郎の「事」俳句批判は真つ当の見解である。しかし六林男は「吹田操車場」によってそのような批判を正面から受け止め、なお、登四郎の「合掌部落」に「事」を要求する。それは、大河を挟んで対岸にいる俳人に向かつて大声で呼びかけているようでもある。

一方の登四郎の六林男句批判は、裏返せば六林男の「詩性」^{ポエジー}への期待である。リアリズムを徹底したことによつて犠牲となつた六林男の「詩性」^{ポエジー}を登四郎は高く評価している。「彼は、もうリアリズムばなれしてもよいのではないかと思う。(略)いい作品をつくり得る人だけに、まったく惜しい^⑩」。

こちらにも、対岸への呼びかけを行なっているが、二つの声が交わり、一つの俳句論として昇華することは無かつた。二人はそれぞれ別の俳句人生を生き抜いた。

4 「合掌部落」の時間

本章と次章では「合掌部落」と「吹田操車場」を「時間」の観点からそれぞれ考察し、比較したい。一作品を通して、また一句一句の中にも、二作品には特異な時間が流れている。そこにはそれぞれが対象とした場所が持つ社会的背景そこで俳句を作る俳人の作家性が影響している。

まずは「合掌部落」から、次の五句に注目したい。

白川村夕霧すでに湖底めく
合掌部落ほろぶ日月の露ふれり
蝗跳ね昼を闇なす空廐
浴衣かけて農夫の午睡死のごとし
鮎突きの端たぎらに抗す若き胴

一句目、村の未来を夕霧の中にへすでに〜
幻視し先取りしている。ここでは、村が消滅

し湖の底に沈むという未来が現在を浸食している。この時間感覚は作者の感受性によるものであると同時に、当時の社会的な潜在意識とも重なるだろう。社会は、湖の底に沈みゆく村を見て見ぬ振りをしたが、登四郎はその一瞬を一句に刻印した。

二句目、へほろぶ日月～では着々と減っていく村の寿命をふるへ露～から感じとっている。この句で捉えられた時間はある一点の地点ではなく、連続的な帯のような時間である。現在のへ露～は村が消滅に至る未来へと溶け出して滴っている。

三、四句目は、一句の裏に人間の時間が消滅した後の世界が幻視されている。三句目、人間も、そして人間が飼う馬も居なくなり、空となった厩には蝗が飛ぶばかりでへ昼を闇～としている。ここに、合掌部落に暮らす人々が連綿と営んできた日常の時間は消え、自然の時間の流れがそれに取り替わって代わる。だから四句目、へ農夫の午睡～はいつとき休

憩ではなくへ死のごとしへと感受される。人間の時間が終わり、元々それ以上に続いてきた自然の時間が村ありし空間を包み込む。大きな時間の流れの視座から言えば、自然の時間の復権は、尤もなことにすら思える。しかしここで、人間と自然の共生する合掌部落が、人工物であるダムの中に沈むという出来事を象徴的な死と言い換えるならば、"殺し"たのは誰だろうか。六林男は登四郎にそう問うているのではないか。自然と人間が共生していた一村の時間を滅ぼしたのは、他にもない戦後日本人の経済至上主義的な生き方ではないか、と。

その批判への細やかな答えとなつていとも思えるのが五句目である。未来あるへ若き洞へ（||村の若者）は、へ滞^{たぎ}へ（||自力では変えられない世の中の流れ）に、必死に抗している。しかし、突かれた鮎は自らや自らの住む村を暗示するかのように、滅びゆく運命には逆らえない。

「合掌部落」の俳句史的価値は、村が減びゆく緩慢な時間と、人間の時間の「不在」を描いた所にあるのではないか。その「不在」は、今の「存在」の中に未来の「不在」をみることである。白川村を単に花鳥諷詠の方法で俳句にしたのでは、それは不可能だっただろう。

5 「吹田操車場」の時間

続いて、「吹田操車場」を時間という切り口で考察していく。次の五句に注目した。

旗を灯に変える刻来る虎落笛

夜明遠し寒灯を振り汽罐車呼ぶ

白息あやか大時計夜を司る

我等に未来仮眠より起き歩き居る

寒夜明け歩きつづける顔煤け

五句を通読すれば、日暮れから真夜中を経

てやがて夜明けに至る、操車場の夜勤者の時間の流れが感じられる。一句独立してこそ俳句であるとする俳句観もあるが、「吹田操車場」は一句一句の行間に流れる時間も織り込んで読めばこそ、その真価が現れるだろう。また、六林男が敢えて選んだ時間帯は「夜」である。一般的社会生活を営むならば、人は、明るい朝昼に活動し、暗くなつた夜は眠る昼行性生物である。それは多くの人にとって自然なことである。そのような自然な時間に反し「徹夜」をして働く労働者を、六林男は時間の流れに沿うドキュメンタリー的な手法で写し取つた。それでは、そのドキュメンタリーは俳句でなくてはならなかつたか？

以下、具体的に掲句を考察し、俳句であることによつて成し遂げられたことについても考えたい。一句一句が自然の時間の流れに抗して突き刺される杭となり、そこからは自然と人間と機械が互いに軋めく音が聞こえてくるようである。

一句目、日が暮れて意思疎通のための合図は「旗」から「灯」にとつて代えられる。日が落ちたから眠って休もう、とはならない。彼らは、――そして現在の労働者達も――働き続けなければならぬ。当時もそして今も、虎落笛は夜勤労働者の背後で鳴り続けている。二句目では「夜明け」を「呼ぶ」ごとく「汽罐車」を「呼」んでゐる。夜勤者にとつて朝を待つ時間は長く辛く感じられる。それは自然の時間とは異質の時間感覚である。三句目、操車場で大勢の労働者たちが確認できるように設置されている「大時計」に、彼らの「夜」の時間は「司」られている。次第に彼らは時間の囚人となり、労働は刑務作業として立ち現れてくる。それにも関わらず、彼らの白息は「あやか」(明らか)で、過酷な労働の中に確かな生の実感を感じとつてゐる。

四句目、正式な就寝をとることはかなわず、「仮眠」を引きずりつつも「歩き居る」彼ら

は一見未来など無い絶望的な状況にすら思える。しかし、へ彼等に未来～ではなくへ我等に未来～とした所に、客観的に観察した結果把握される事実ではなく、労働者本人の主観的な真実が表されている。そこには、確かにへ未来～があるのだ。

五句目、ようやく辛いへ寒夜～が明けた。へ歩きつづけ～には一夜の継続的時間が含意されている。その時間は顔に降り積もってついたへ煤～として可視化されてもいる。へ顔煤け～からは、過酷な労働の様が伝わってくる。同時に、長い夜が明けたことへの安堵も感じられる。

6 登四郎と六林男の交叉点

ここまで、二作品の作られた背景、互いの批判点と相違点、それぞれ時間をキーワードとした考察を行なった。本章ではそれらを総合して、二者の交叉点を考察したい。

先にも述べたが二作品はしばしば「社会性俳句」の代表的作品として位置づけられる。しかし俳句史的には、いわゆる「社会性俳句」は一時の流行で過去の遺物とされている。それは、イデオロギーが直接スローガンと化し、また金子兜太氏の次の指摘にもあるように、あくまで「素材的リアリズム」にとどまり、「新月並であったといいたくなる^④」ような作品が溢れたからであった。私は、失墜した「社会性俳句」を乗り越える形での、新しい時代の俳句の「社会性」の糸口として、二作品を捉えたい。

二作品に共通する「社会性」とは、「社会のアクチュアルな時間感覚を刻印すること」ではないだろうか。次の高澤晶子氏の鈴木六林男論はその意味でも鋭い示唆を与えてくれる。

過去の社会的現象を現在から俯瞰することは容易いが、時代の只中であつて時代のリアリティやアクチュアリティを的確に俳句作品として刻印させる慧眼は、状況から状況を透過する六林男の方法論に通底する質のものである^④。

引用上の「六林男の方法論」については本論では詳しく触れられないが、高澤氏の言う「時代の只中であつて時代のリアリティやアクチュアリティを的確に俳句作品として刻印させる慧眼」は、六林男のみならず登四郎にも備わっており、それこそが二人の間に通底するものだと考える。

特に私は、アクチュアルな「時間」に拘りたいと思う。登四郎の「合掌部落」は単なる一地方の「風土」詠では無く、また無常的な滅びゆくもの一般を詠った作品でもない。極めて当時としては現代的な「時間」が描かれ

^④ 高澤晶子『第三突堤』時代の只中で

ていた。それは、人間によって人間の時間が断たれ、未来が人工的に現在に押し寄せるアクチュアルな時間である。一方の六林男は、昼夜を問わず動きつづける労働現場において、時間に支配され、自然環境と闘いつつ、それでも生き抜く人間の時間である。こちらにも、当時の社会のアクチュアルな時間感覚が俳句に結実しているのだ。

7 おわりに

能村登四郎の「合掌部落」と鈴木六林男の「吹田操車場」を「時間」の観点から比較し、両者に通底するものを探った。両者はそれぞれ時代を象徴する「空間」を舞台に選んだ。そして、その「空間」に流れる「アクチュアルな時間」を俳句の連作という形に結実させた。

俳句が春夏秋冬という円環的な時間に息づく「季語」を伝統的な基盤としてきたことに

照らせば、この「アクチュアル」であることは伝統的「俳句性」に反するかもしれない。登四郎と六林男の「フアイト」はそこにあつたのだ。しかし、登四郎は六林男の「吹田操車場」を後に評して「いま冷静に鑑賞してみても果たして当時の感動がそっくり伝わってくるかと言うと、残念ながら色褪せたフィルムのように妙に白々しいものだけが残る」と言つた。これは「吹田操車場」へ向けた弁だが、自身の「合掌部落」への自照でもあるだろう。冒頭に引用した「成果はともかくとして」という両者に共通する自省的な言葉にもそのことは伺える。後々「白々しい」ものと化したとしても、俳句にしなければならぬ「アクチュアルな時間」が同時代の二人にはあつた。この二人の俳人に共通する「時間」を「社会性」と呼んでもいいのではないか。後世に残るかどうかなど「今」は与り知らぬことで、それはそれで一つの「俳句」の在り方である。最後に、改めて、能村登四郎と鈴木六林男

は、俳句の方法論の異なる俳人である。しかし、その基盤となる「俳句性と常に闘う姿勢」において通底している。互いに惹かれたのもそれが故だろう。

そして、お互いの作品を批評し欠点として挙げた「背後にある真実」や「詩性^{ポエジー}」という指摘は、これから俳句の「社会性」を追求し一句を作る者たちに、自句を省みさせるだろう。また実作「合掌部落」「吹田操車場」は、時局的な価値を超えて、今後も俳句史における碑^{いしづみ}としてありつづけるだろう。「社会性俳句」は流行として終わったが、人間と社会との関わりは、「アクチュアルな時間」と共に変遷しつつ、終わることがないのである。

〈参考文献一覧〉

- ・ 増補版『能村登四郎読本』(平成二十一年・富士見書房)
- ・ 能村登四郎俳論集『伝統の流れの端に立つて』(昭和四十七年・永田書房)より「伝統の流れ端に立つて」 「俳句の非社会性」
- 他
- ・ 『鈴木六林男全句集』(昭和五十三年・牧神社)
- ・ 鈴木六林男『後座』(昭和五十六年・現代俳句協会)解説 能村登四郎「不撓の旗手」
- ・ 鈴木六林男『定住游学』(昭和五十七年・永田書房)より「短い歴史」 「補記・能村登四郎覚書」他
- ・ 『高澤晶子著作集』(平成二十一年・花林の会)
- ・ 「俳句研究」35・7月号(昭和四十三年・角川マガジンズ)金子兜太「社会性の行方」
- ・ 「俳句研究」42・10月号(昭和五十年・角川マガジンズ)鈴木六林男「能村登四郎覚

書

「俳句研究」43・9月号（昭和五十一年・

角川マガジンス）能村登四郎「鈴木六林

男・人と作品」

「俳句」³⁴・11月号（昭和六十年・角川書

店）沢木欣一／岸田稚魚／川崎展宏「俳句

と時代 社会性俳句をめぐって」